

# オイロはトイロ?

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-04-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西嶋, 義憲, Nishijima, Yoshinori メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/00053836">http://hdl.handle.net/2297/00053836</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# オイロはトイロ？

西 嶋 義 憲

2002年1月1日から、統一通貨「ユーロ」がEU15カ国のうちの12カ国で導入された。私はたまたまこの時期にドイツに滞在する機会を得、この通貨の切り替えを体験できた。以下は、その体験報告である。

## 1. ユーロ導入

### 1.1 統一通貨ユーロとドイツマルク

EU諸国のうち、2002年1月1日から統一通貨「ユーロ」を市場通貨つまり現金として導入したのは、ベルギー、ドイツ、フィンランド、フランス、ギリシア、アイルランド、イタリア、ルクセンブルク、オランダ、オーストリア、ポルトガル、スペインの12カ国だ（ちなみに「ユーロ (Euro)」の発音は、導入国の使用言語で異なり、ドイツ語発音では「オイロ」。記号は共通で、„C” に横棒2本）。これらの国々では現金が流通する前から、すでに銀行間での取引はユーロで行われていた。したがって、各国の通貨とユーロとの交換レートは固定されている。ユーロとドイツマルクとの換算関係は、1ユーロ＝1,95583マルクと決められている。ドイツ連邦銀行発行のユーロ対マルク換算早見表が街の銀行などで入手できるが、それを利用すると、ユーロとマルクの正確な換算を簡単に行うことができる。しかし、実際の生活では大雑把に、1ユーロは2マルクと考えておいていいだろう。なお、このユーロとマルクの関係は、私がこちらに来た2001年9月の時点ですぐに実感できた。銀行の収支明細や給料明細、切手などにはマルクとユーロが併記されていたし、商店によっては、商品の定価がマルクとユーロの両方で表示されているところもあったからだ。

2002年1月1日の現金導入後も、自国の通貨を続けて使える移行期間が設けられている。しかし、その設定期間は各国まちまちのようだ。たとえば、ドイツは、2月末日まで併用できることになっているが、フランスは2月17日までだ。移行期間終了後の使い残したマルクやペニヒは、州中央銀行でいつでもユーロに換金してもらえるので、残しておいても何ら問題はないとのことだ。

### 1.2 ユーロの紙幣と硬貨の種類

ユーロ紙幣は、通貨同盟国すべてで共通で、7種類（5/10/20/50/100/200/500 Euro）。ユーロ硬貨は2種類（1/2 Euro）で、片面は共通だが、裏面は各国のシンボルが刻印され

ている（ドイツはブランデンブルグ門）。セント硬貨は6種類（1/2/5/10/20/50 Cent）。なお、1 Euro=100 Cent である。

統一通貨の硬貨は前もって、導入2週間前の2001年12月17日から手にすることができた。「スターターキット」である。これは、事前にユーロに親しませるために、銀行で販売されたユーロ硬貨のセットのことだ。このセットは20マルクで売られ、中身は10.23ユーロ分の硬貨がビニールで袋詰めされている。私は、発売の2、3日後に難なく購入できたが、発売初日には客が殺到して、地域によっては買えない人もいたらしい。

### 1.3 ドイツ語の中のユーロ

ところで、ドイツ語の名詞にはすべて、男性、女性、中性という文法上の性別がある。通貨だって例外ではない。„Euro“（ユーロ）と „Cent“（セント）は、ドイツ語では両者とも男性名詞に分類されている。„Mark“（マルク）は女性名詞だったけれど。

### 1.4 「丸くする」

ユーロが導入されるにあたって予想される危惧があった。各国通貨との交換レートは1対1ではないので、どうしても端数の処理という問題が生じてしまう。端数を「丸く」（「マルク」の語呂合わせではない、念のため）切り上げることによって、物価の上昇が起こるのではないか、また、それに合わせて便乗値上げをする業者があるのではないか、というのがその問題だ。そしてそれは、実際に一部で起こったのだ。

## 2. ユーロ導入による混乱

### 2.1 お釣りはユーロ

スペインでも統一通貨ユーロが導入され、ペセタからユーロ（スペイン語では、「エウロ」）に切り替わった。年末年始（12月23日から1月6日まで）、私は家族とスペイン領カナリア諸島の一つグラン・カナリア島（ドイツ人旅行者が多く、日本人にとってのハワイのような島）で過ごした。ペセタからユーロへの切り替え初日の1月1日は、バスでプエルトリコに出かけた。バス代はユーロでもペセタでも支払うことができた。私はペセタしか持ち合わせがなかったので、ペセタで払った。ところが、つり銭はユーロだった。同じことは、スーパーでも経験した。

グラン・カナリア島からレーゲンスブルクにもどってきた日の翌日、1月7日に街を回ってみた。すでにふれたように、ユーロとマルクの併用期間は、2月末日までと決められている。ところが、実際は、1月1日からユーロしか使えないところが多かったようだ。

バスに関して言えば、車内での両替やつり銭の煩雑さからユーロでしか切符が買えない。多くの商店でも、つり銭の都合上ユーロのみでの支払いとなっている。

## 2.2 値上げ?

商店やレストランでの通貨表示の切り替えによる値段への影響はさまざまだ。ユーロ導入後、値段にほとんど変化のない店もあるが、明らかに「便乗値上げ」をしている店舗も見られた。いきつけのパン屋では、値段の差はほとんどなかった。たとえば、いつも食べているフォルコルンブロット「トースト」500グラムは、3.50マルクだったが、1.80ユーロで売られている。早見表で換算すると、3.50マルクは1.79マルクなので、実質的に1セントだけ値上がりしているが、これは「誤差」の範囲として納得できる。

ところが、近年レーゲンスブルクのあちこちに出店している自然食料品店 (Bio-Laden) では、明らかな「値上げ」があった。たとえば、一瓶2.99マルクだったジャムは、1.59ユーロで販売されている。2.99マルクは1.53ユーロに換算されるはずなので、6セントの値上げということになる。これも、好意的に解釈すれば、心理的に割安だと思わせる数字マジックのために、99という数値を使ったからだと理解できないこともない。しかし、端数の切り上げ以上の「換算」があったといわざるを得ない例もある。ドレーステンの観光案内所 (インフォメーション) では、12.95マルクのガイドブックが6.90ユーロで売られていたのだ。12.95マルクは、換算表によれば、6.62ユーロなので、28セントの実質的値上げだ。丸くするという意味で容認できる範囲は、せいぜい6.70ユーロまでだろう。明らかにその範囲を超えている。

一般に新聞などで値上げの槍玉にあげられるのは、レストランや喫茶店、飲み屋などの飲食店だ。近所の飲み屋の例を挙げてみよう。0.5リッター4.80マルクのビールが、2.50ユーロになっている。4.80マルクは2.46ユーロに換算されるが、端数の46セントを切り上げて50セントにしたと考えれば納得できる額と言える。もちろん、4セント値上がりしてはいるが。

## 2.3 チップの計算

飲食店で困るのは、チップ (Trinkgeld) の計算だ。これまで、たとえばビール一杯4.80マルクだったとしたら、丸くして5マルク支払い、端数の20ペニヒをチップにした。これがユーロだとどうなるか。同じビールが2.50ユーロだとすると、いくら払えばいいのだろうか。単純に端数を丸くすると、3ユーロになり、チップは50セントになってしまう。つまり、98ペニヒ分をチップとしてあげることになる。客は、マルクの時代より、無意識の

うちにチップを大判振る舞いしてしまうわけだ。ウェイターやウエイトレスにとってはうれいかもしれないが。しかし、これは、今後の移行にともなう混乱期だけのように思われる。ユーロに慣れてくれば、相応の額のチップに落ち着くだろう。

### 3. オイロはトイロ？

「トイロ」はドイツ語の新聞や雑誌などでよく目にする語呂合わせだ。統一通貨ユーロ (Euro) は、ドイツ語読みでは、「オイロ」。ところで、値段が高いことを表すドイツ語の形容詞は、„teuer“ (トイヤ)。両語の前半部の母音は「オイ」で共通している。そこで、二つの語を語呂合わせで組み合わせた表現「トイロ」(Teuro) が作られた。「高いユーロ」というわけだ。

さて、日常的に目にする食料品などの値段から、主観的にはユーロ導入による物価の値上がりはあったと感ぜられる。専門家はどうか見ているのだろうか。ヴィースバーデンの連邦統計局によると、たしかに1月期の物価は上昇しているが、これは、南ヨーロッパの異常寒波による不作と種々の税金の引き上げによるものと説明している。庶民の感覚と異なるのは、考慮される物品が違うかららしい。われわれは、どうしても財布から直接代金を払う食料品や飲食店の支払いなどに着目してしまいがちだ。しかし、物価の上昇を正しく分析するためには、さまざまな種類の物品の値段を考慮しなければならない。市民が値上がりを感じる物品は、その調査対象項目の中の4分の1程度にしか過ぎないので、ユーロ導入による物価への影響は、庶民が騒ぐほど大きくはなく、客観的には極めて小さいはず、という説明だ。

### 4. おわりに

専門家が、ユーロ導入による物価高騰への直接の影響はないという見解を述べたとしても、われわれ庶民の生活感覚からすれば、にわかには信じられない。日常的な経験に即して言えば、一部ではあるが、食料品などで値上がりは確かに認められたからだ。そのような食料品をほぼ毎日購入している一般市民の目には、物価は上がったと感ぜられる。その意味で、「トイロ」(高いユーロ) という語呂合わせは、妙に納得のいく表現に思われる。

(金沢大学助教授)